

もっと多くの人を救えたかもしれない

——「被災者」側から見た震災報道

吉田清彦

1. はじめに

私が住んでいた、築後28年の木造2階建ての安アパートは、被害の大きかった神戸市灘区のなかでは、ほんの少しばかり山側（北側）に建っていたというだけで、最初の一撃による倒壊は、からくもまぬがれた。

だが、1階の角のところの柱が折れ、他の柱も、土壁がはげ落ちてしまってみると根腐れを起こしていて、余震の度にゆらゆらと揺らぐありさまで、1週間目に、とうとう避難勧告が出されてしまった。

いまは、神戸市から北西に40キロほど離れた、東播磨の加西市の知り合いの家に身を寄せての「疎開生活」である。

『マスコミ市民』編集部から与えられたテーマは、「マスコミはまともな報道を行ったかどうかの検証」を「被災者の立場から」というものだが、その要望にどれほど応えられるか、はなはだ心もとない。

理由は二つある。

一つは、今回の震災における「被災」には、じつにさまざまな“レベル”があるのに、そういうことを等閑視して、「被災者」とひとくくりにして語ることに、もともと無理があるし、抵抗もある。

もう一つは、被災の「内側」にいた者は、実は、あまり「まとも」にマスコミ報道に浴していないのである。だから、「まとも」な報道が行われていたかどうかを「検証」することは、どだい困難なことなのである。

というわけで、編集部の注文からは少し離れることになるが、今回の震災のなかで、私自身がどのようなメディア環境に置かれ、そして、そこでメディアに対してどのようなことを考えたかを報告することにしたい。

2. 初動段階での情報の欠如

地震の発生と同時に停電した。建物が裂けて崩れ落ちるのではないかと思うほどの揺れが一時的におさまった暗闇のなかで、まず考えたことは、部屋の内と外で「いったい何が起こり、どうなっているのか」をともかく知りたい、ということであった。

懐中電灯の用意はなかったが、ろうそくは買い置いてあったはずと探そうとしたが、部屋中がものの見事にでんぐり返っている様子で、一つ一つの物の在りかなど分かるはずもない。台所にライターがあるのを思い出して、それで部屋の「内」の大体のありさまはうかがい知ることができた。

次は、「外」の様子・状態である。寝るときはいつも枕元に携帯ラジオを置いていたのだが、これも倒れ込んできた本棚や整理ダンスの下になっていて、暗闇のなかでは探しようがない。暗いなかで下手に動いても危ないだけなので、じたばたせずに夜が明けるのを待つことにした。

ほどなく明るくなりしはしたもの、部屋のなかの散乱ぶりは想像以上で、何から手を着けていいか分からないくらいにすさまじい状態だった。ラジオを探し出すのはあきらめ、自分の目で外の様子をうかがうことにする。

戸の前にも物が折り重なってくずおれているので、外に出るのにも一苦労したが、ともかくも外に出てみるとびっくりした。

私のアパートのある辺りは、まだ、壁や塀が崩れたり、屋根瓦が落ちたり、といった程度だった。それが、坂道を海側（南側）に下りるにしたがって、建物全体の損壊・倒壊している割合が次第に多くなり、10分ばかり南に下ったところにある商店街は、半ば壊滅状態となっていた。

8時すぎからお昼すぎまでの4時間くらいの間、呆然と周辺一帯を歩き回っていたことになるだろうか。その間、2か所で、携帯ラジオが屋外に置かれていて、大地震発生とそれに続く火災の頻発とを伝えていた。

だが、まだ、その時点では、各地の死者数は2桁台で報じられていて、あとで知ることになるほどの大惨事になっているとは知る由もなかった。

周り一帯の様子は、とにかく大体知ることができたので、次は、「全体として」いったい何が起こったのかを詳しく知りたくて、家に帰って、散乱物のなかから携帯ラジオを探し出すことにする。

夕方近くになって、やっと探し当てることのできたが、電気、水道、ガスなどの復旧にはかなりの時間がかかることや、鉄道や道路が寸断されていて、神戸地区が陸の孤島状態にあることなどが繰り返し告げられていて、その時点で、相当の“長期戦”になることを覚悟した。

と同時に、「今後、マグニチュード6（震度5）クラスの余震が起きる恐れがある」と、何度も何度も「注意」が呼びかけられていて、そのことがとても気になる。

すでに柱が1本折れてしまっている我がアパートは、震度3ならなんとか持ちこたえそうだが、震度4や、ましてや震度5などだと、今度こそは駄目だろうと覚悟はするものの、一体どう「注意」すればいいというのだろう。

その夜は日が落ちて暗くなったあとすぐに床に就いたが、ラジオは小さくつけたままにしておいた。また、表戸の鍵はかけず、玄関口と部屋のあいだのガラス戸も空けたままにし、そして、危険を感じたらすぐにでも飛び出せるようにと、ズボンと靴下を履いたまま、布団の上には、財布、貯金通帳、それにマフラーなど最小限必要なものをポケットに詰め込んだコートを乗せて寝た。

幸いなことに、その夜（18日未明）2時すぎに、周辺から北側一帯に電気が通じた。

電気が通じれば、あとは給水を待てば、炊飯器でご飯を炊くことができる。また、ポットがあれば湯を沸かすことができ、カップ麺やレトルト食品を食べることもできる。ホットプレートがあれば、肉や野菜を焼くこともできる。食べ物に関しては、随分状況が変わってくるのである。

メディアに関しても、電気が回復すれば、まず、テレビを見ることができる。それに、わが家にはないが、パソコンがあれば、パソコン通信でこちらから、いろいろ必要な情報を聞き出したり、送り出したりすることも可能になる。

3. テレビの映像が被害に拍車？

ところで、私が実際にテレビを見ることができるようになったのは、通電してから15時間後の、18日の夕方になってからである。

テレビが壊れていたわけではない。わずか6畳の狭い部屋だが、2メートルばかり先にあるテレビの前に本棚などの倒壊物が折り重なっていて、それを片づけないことにはテレビまで到達することができない。

すでにラジオを聞くことはできていたので、あえて倒壊物を乗り越えてまでテレビを見る必要は感じず、手前にあるものを一つずつ片づけていたので、テレビにまで行き着くのに時間がかかったわけである。

それはとにかく、テレビの映像は衝撃的である。そして、“説得的”である。

高速道路や鉄道は到るところで崩壊、寸断しており、木造家屋は軒並みべちゃんこに潰れ、鉄筋コンクリートのビルさえもが倒壊している。さらには、各所から火の手が起り、瞬く間に町を火の海へと呑み込み、焦土と化していく様子が、何度も何度も繰り返し流されていく。

テレビの映像を見た災害の「外側」の人達は、災害の「内側」にいる身内や友人の安否を気づかって、一斉に電話をかけ、電話が通じないとなると、次には、車で被災の町に出かけていった。そして、身内や友人のために水や食料を満載した車が、さらに輪をかけて被災地へとなだれ込んできたのである。

そのことが結局は、通信や交通の混乱をさらにひどくし、結果的に被害を大きくしたとも言われている。結果論ではあるが、テレビ



の映像が被害の拡大に手を貸した、と言えなくもない。

もちろん、それはテレビの責任というよりも、第一義的には、そういうことに対応できなかった行政の責任なのだろうが、行政が実質的に混乱、麻痺していたことを考えると、マスコミが実際に果たした役割とその責任は今後もっともっと問われるべきものだと思う。

ところで、もう一つのマスメディアである新聞についても書いておかねばならない。

結論から言うと、今回のような大震災の初動段階において、新聞はまったく無力であった、と言わざるを得ない。なにしろ、鉄道や道路が寸断されてしまい、さらには専売所の建物や人的被害も重なって、新聞は、被災地の「内側」には届かなかったのである。

ちなみに、わが家には、やっと19日の朝になって、その日の朝刊と前日の夕刊とが一緒に届けられた。

4. 「外」と「内」との情報の落差

さて、ここで、地震直後の17日未明から3日目の19日までの間、私がどのようなメディア環境に置かれていたかを、少し整理しておこう。

家屋の倒壊をまぬがれて、とりあえずは避難所へ行かなくてもすみ、さらには2日目の未明に一带の電気が回復したという条件の私の場合で、冷静な状況判断に必要な、地震に関する情報は、次のような順序で入手することができた、ということになる。

①17日午前、屋外に置かれた携帯ラジオから流れる放送（NHK第1）で、音声情報を断片的に。

②17日夕方以降は、室内の倒壊物のなかから探し出した携帯ラジオの放送（主にNHK第1）で、音声放送を終日、継続的に。

③18日夕方より、テレビ（主にNHK）で、映像および音声情報を終日、継続的に。

④19日朝からは、配達が再開された新聞によって、活字情報を定期的に。

ところで、これが、最初の段階で住む家を失って、避難所生活を余儀なくされていたとしたら、メディア環境は、当然根本的に違っていただことになる。

行政からの直接の情報は皆無に等しかったので、当初の情報源は、ほんの数人が持ち出すことができた個人所有の何台かの携帯ラジオだけでしかない。そして、電気が回復してからも、全ての避難所にテレビが届くまでには、なお数日を要している。

専売所の好意で一部の避難所に新聞が届けられるようになったのは、おそらくかなり後になってからであろう。

このように、一口に「被災者」と言っても、その被災の程度と、その後置かれた状況は、“天と地”ほどの違いがある。そして、必要とする情報の優先順位も当然異なってくる。

5. 情報の優先順位

そこで、今回の被災の“程度”を重い順に書き並べ、それぞれが最も必要とした情報を書き添えてみると、大体次のようになる。

①死者、行方不明者とその縁者——安否および救出に関する緊急情報。

②倒壊や焼失で住むべき家を失い、避難所生活を余儀なくされた人（約30万人）——水、食料、衣類、生活物資、トイレ、暖房、風呂、医療などに関する情報。および、住宅や教育をはじめとする今後の生活の見通し。

③被災にあったが、自宅で何とか生活している人（約70万人）——電気、水道、ガスなどの復旧情報および食料品、医療などの生活情報。および、余震に関する情報、建物に対する危険度判定。

④家屋などに大きな被害はなかったけれど、「域内」で生活している人（約200万人）——鉄道、道路などの交通の復旧情報。および、街全体の復旧の見通し。

⑤住む家を失ったが、「域外」に疎開した人（約10万人）——住宅情報および街全体の復旧の見通し。

もちろん現実には、さらにさまざまな状況が交錯していて、こんなに簡単に整理できるものではない。それを承知の上で論を進めると、マスコミが、ここで整理したような優先順位に応える形で報道できたかどうか、ということがまずもって検証されなければならないだろう。

結論を急ぐと、①のなかの行方不明者の救

出に関して、行政はもちろんマスコミも非力だったことを大いに反省しなければならない。

地震直後の報道は、交通の各所での分断や電話回線など通信機能の極度の低下ということもあって、主に警察情報を頼りに、その被害の程度を、実際よりかなり軽く見ていたきらいがある。

ちなみに、警察庁の「被害集計」は、17日午前12時の段階では「死者203人、行方不明者331人」、午後12時の段階でも「死者1590人、行方不明者1017人」としか報告していない。

今、最終的に、死者は5400人にも届こうとしている。だから、実際には、倒壊物に埋もれて救出を待っていたかもしれない行方不明者は、17日午前12時の段階では5200人、午後12時の段階でも3800人もいたことになる。

陸路からの「域内」への進入をあきらめたマスコミは、主に空からの映像に頼ったが、その“迫真に迫る”映像の下で、救出を求めつつもむなしく死んでいった人たちの姿を捉えることはできなかったのである。

6. “希望”を生み出す情報を

時間が経過するにつれてのその後の報道については、おおむね「よく頑張った」と言うことができる。

それは、その後数日を経て、全国からあふれるように届けられはじめた救援物資や、ボランティアの広がりを見れば明らかである。

とくに、ラジオでは、NHK第1放送が、終日地震関連のニュースを流しつづけるだけでなく、神戸市役所のなかの災害対策本部内に臨時のスタジオを設けて、かなり早い段階で、毎時30分からの「被災者生活情報」および「地震関連生活情報」を（おそらく19日から）開始して、生活に関する情報を定期的に流していった。

このことでは、さすが全国ネットの“国民放送”として、過去の震災報道の経験の蓄積が大いに生かされている、と感じた。

情報が不足して不安にかられている人たちにとって、被害の規模・大きさについての正確な「被害状況」も、たしかに大事である。

だが、それ以上に、こういう不安な状態や不便な状態がいつまで続くのか、いつまで辛抱すればいいのかという、将来に対する「見通し情報」が必要なのである。

そして、さらには、いろいろなところで、少しずつでもすでに復旧が始まっていることを伝える「復旧情報」や、少しでも生活に役立つ細々とした「生活情報」などといった、将来に対する“希望”を得ることができるような情報こそが大切なのである。

そこで、次に、新聞報道における「生活情報」について言及すると、最初の数日はともかく、これも日を追って質・量共に確実に増えていった。

7. 新聞の「生活情報」の検証

今ここで、当初数日間の大手5紙の、生活情報に関する紙面をざっと追ってみると（ただし、神戸版ではなく、疎開先の播磨版・朝刊のみ）、次のようになる。

朝日新聞：19日から、第1面に「交通とくらしの被害と復旧状況」欄開始（JR、私鉄など、道路、電気、水道、ガス、電話の7項。20日からは、住宅、衣食の2項追加）。

20日から、社会面に「被災関連情報コーナー」の頁開始（生活、支援、義援金の3項。21日からは、教育、行方不明者相談所などの項も）。

第2兵庫面にも「被災関連生活情報」欄開始（給水、市場、医療、区の問い合わせ先の4項）。

毎日新聞：19日から、生活面に「毎日希望



新聞」の頁開始（被害者Q & A、がんばれメッセージ、いま私は、インフォメーションの4項。22日からは2頁建てになり、入浴可能な施設、無料公衆電話設置場所（23日）、仮設住宅応募受け付け（24日）などの項も。

20日から、社会面に「生活の被害と復旧状況」欄開始（電話、電気、水道、ガス、行方不明相談所の5項）。

読売新聞：20日から、総合面に「震災掲示板」の頁開始（安否知らせて、力になります、元気です、その他の4項。21日からは2頁建てになり、24日からは救援情報、27日からは診療可能な医療機関の項も加わる）。

同じく20日から、総合面に「市民生活の被害と復旧状況」欄開始（鉄道・道路、電気・水道・ガス、電話の3項）。

これとは別に、総合（兵庫）面に阪神間の主な避難場所、社会（兵庫）面に水道・ガス復旧見通しの記事も。

産経新聞：21日から、1面に「復旧情報」欄開始（JR、私鉄、道路、電気、ガス、水道、電話の7項）。兵総合面に「支援広場―大震災から復興へ」の頁開始（神戸市内の主な避難所などの生活情報など）。

日本経済新聞：21日から、「地震／生活情報」ミニ欄開始（電気、水道、ガス、鉄道、道路、電話、警察、スーパーの8項。22日からは警察がなくなり、住宅、ふろ、福祉、医療、郵便、払い戻しの6項が追加。

23日には、宿泊、教育、支援の項も）。

その後各紙とも生活情報をますます豊富にさせていることは承知の通りである。

テレビやラジオの音声情報が聞き漏らしの恐れがあるのに比べて、活字情報は、速報性では劣るとはいえ、正確さと、手渡しや閲覧によってより多くの人に伝わるといふ長所を持っていることは疑いようもない。

これら、活字による生活情報が、さらに1日でも2日でも早く始められていたら、「被災者」の生活に対する不安や不自由さは、それだけ早く緩和されていたはずである。

ただ、問題は、これらの活字情報が、それらの情報を一番切実に必要としている、避難

所で暮らす人たちにどの程度に届けられているのだろうか、ということである。

8. もっと多くの人を救えたのでは

テレビの報道についてももう少し触れておこう。

初動段階での、被害の大きさに関する正確な把握および人命救助に関するテレビの報道の非力さについてはすでに触れた。

この段階では、新聞も含めてマスコミは、“命を拾った人”への救済（水や食料の援助など）を後回しにしてでも、倒壊物の下で生き埋めになって、まだ生きている可能性のある人たちの救助と消火活動とを最優先したキャンペーンを、（国に対しても、全国の自治体に対しても、企業に対しても、視聴者に対しても）張りつづけるべきだったのではないだろうか。

何よりも必要だったのは、被害の大きさを伝えて混乱に拍車をかけることなく、事態を正確に伝えて、いま何を最優先すべきか、そして何をしてはいけないかを、冷静に訴えるべきではなかったのか。

19日付の朝日新聞によると、「崩れた家屋やマンションの中に住民が取り残されている可能性があり、掘り起こしが必要な場所は（神戸）市内に計600カ所」あったという。

平時においては大変危険なことではあるが、大災害時には人命救助を最優先させて、“世論誘導の道具としてのマスコミ”ということを考えてもいいのではないだろうか。

通信の混乱などにより、人的被害の大きさをはじめとする正確な被害状況をキャッチすることができなかった、と言いつける人もいる。だが、それは、報道に携わるものとして、そもそもそういう場合を想定した危機管理を行っていなかったことを、その前に、問われるべきである。

具体的に言えば、一部の企業が採用していたという専用回線や通信衛星回線あるいは専用無線といった、一般の電話回線に頼らない通信手段を、自社もしくは共同で用意していなかったことが、まず責められる。

そして、そういった設備が莫大な費用を要するというのであれば、例えば、全国各地

の無線愛好者のリストを持っているというだけでも、「域内」からの情報を迅速に得ることは可能だったのではないのか。

警察情報や行政情報などに安易に寄りかかるのではなく、“町ネタ”を拾い上げるための日頃からの地道な取材活動の積み重ねによって得られる人脈（ネットワーク）（個人やグループや企業の各窓口など）を、記者個人の財産としてだけでなく、今回のような「非常時」には、社全体の財産とすることができるようシステムを作っているだけでも、状況はかなりは違っていたのではないだろうか。

9. 報道のかたより

「被災者」の状況を伝えて救援を仰ぐという点においてマスコミが今回果たした役割に関しては、すでに述べたとおり、これはたしかに、大いに評価すべきである。

ただ、テレビの場合、放送設備の移動の難しさなどの理由があるのだろうが、「避難所からのレポート」において、NHKも含めた民放各社共に、西宮および東灘、灘などの一部の避難所へのかたよりが見られて、それも一因となって救援物資の配分の大きなかたよりがあったことは、とても残念なことである。

とくに、NHKは、「大阪、神戸の放送局の約550人の取材陣に、東京や他の地方からの応援組を加え最大1000人近い体制をと」った（23日付神戸新聞）だけあって、その後の「検証報道」も含めて、全体的には非常に優れた報道を行いながら、この点では民放各社とさほどの差がでなかったのは、日頃の取材姿勢に問題があるのかも知れない。

また、この問題に関連して言うと、すでに述べたように、たしかに、被災の程度に“順位”があるとはいえ、あまりにも避難所で暮らす人ばかりが取り上げられて、上記で言えば、例えば、「被災にあったが、自宅で何とか生活している人」などの生活ぶりがほとんど取り上げられなかったのは、やはり報道としての公正を欠いているように思う。

生活の援助においては、避難所で暮らす人々を最優先にすべきであることは当然ではあるが、報道（の公正）ということになると、少し違ってくるのではないのか。

避難所で暮らす人々以外も、その被災のレベルに応じたさまざまな困難を抱えて生活しているのである。

この文章のはじめのところで、「被災者」とひとくくりにしてしまうことに抵抗があるとしたが、実は、そういう、「被災者」を十把一からげにして、一人一人の人間を見ない無神経さこそが、今回の報道の初期の段階の一つの特徴でもあったと言えよう。

みずから地べたを這って“町ネタ”を集めずに、避難所の生活だけを繰り返し繰り返し映し出すことは、報道としての怠慢と言われても仕方のないことではなかっただろうか。

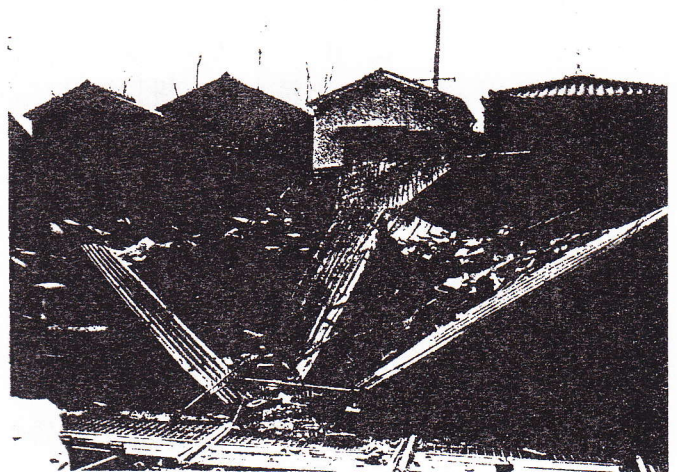
10. 本当に「天災」なのか？

さて、話は少し脇道にそれるかも知れないが、今回の大地震が「大災害」となったのは、住宅政策・街づくり政策に対する行政（神戸市）の無策に原因があるのではないかと、という意見が、神戸大学教授（建築学）の早川和雄氏から出されている（21日付朝日新聞）。

灘区で私が見た範囲だけでも、木造住宅、それも築後30年も40年も経っているような老朽化した建物に被害が偏り、またそれだけ、人的被害も大きかったように思われる。

その後の調べでも、「神戸市内でも多くの家屋が倒壊したが、屋根が軽く新しいプレバブ住宅の被害は軽かった。古い住宅に被害が多かったのは、（19）71年の耐震基準の改善などが反映しなかったためらしい」（21日付朝日新聞夕刊）、ということである。

この新聞記事は、行政の住宅政策という視点をまったく欠落させているが、とても荒っ



ばい言い方をすれば、次のような言い方をすることができるのではないだろうか。

つまり、戦後の混乱のなかで、経済的余裕もないままに、木造長屋や“文化住宅”という名の安アパートに住みついて、娘や息子たちを育てあげて“都会”に送り出し、自分たちは、その後の70年代以降の“高度成長”にも関係なく、ましてや“バブル”の恩恵を受けることもなく、マンションや一戸建ての住宅を手に入れることはもちろん、家を建て替えることもできずに（というか、せずに）、古い家のままに住みつけ、つつましい暮らしに甘んじつづけた人たちが、今回、より多く瓦礫の下に埋もれたわけである。

それは、今回死亡した人たちの半数以上が60歳以上の高齢者だった、ということのなかにもうかがえる。

もしも、神戸市の過去の住宅政策が、経済的貧困層に、より手厚く講じられ、この人たちが、政策的援助のなかで新しい住居に住み替えることができていたなら、人的な被害はもっと低く抑えられていたはずである。

行政がこのことを認めて、経済的貧困層に、より積極的な救済の政策を打ち出さないかぎり、持てるものと持たざるものとの経済格差は、今後さらに広がり、持たざるものの生活不安は、より増すばかりである。

一部の報道では、神戸市が活断層の上にあり、震度7クラスの地震の恐れもあるという専門家の防災計画報告書が過去に神戸市に提出されているが、神戸市はそれを握りつぶしていた、ということである。

もし、そうであるなら、行政当局の犯罪性はより大きなものとなる。

これらのことについてマスコミは、独自調査に基づいて、もっと精力的に報じ続けていくべきではないだろうか。

弱者の立場に立ったマスコミのバックアップが、今こそ求められている。

11. 今後の教訓

さて、今後の教訓ということについて、簡単に記しておこう。

これはメディアだけでなく、災害の予防や救済など、あらゆることについて言えるのだ

が、たしかに、行政に対して、もっともっと厳しく要求していくことは大事である。

だが、それらは、いくら要求していても完璧なものになるということとはあり得なく、それだけを当てにしていると大変なことになることが、今回はっきりしたわけである。

つまり、そういったものとは別に、普段から、個人、家族、サークル、地域といったあらゆるレベルの自前の防災および救援のネットワークやシステムを張りめぐらせておく必要がある、ということである。

個人や家庭レベルとしては、常時から1週間程度の食料や水の備蓄が必要だろう。地震直後の数分は水道がまだ出るので、ガスの元栓を閉めたあとは水道を全開して、貯められるだけの水を貯めるという知恵も必要だろう。

家族のいる人は、被災後30分もしくは1時間後のとりあえずの集合場所（避難場所）を決めておくことが何よりも大切である。そうすることによって、もし、誰かが逃げ遅れた場合、誰がまだ瓦礫の下にいるかということを知り、周りの人たちに正確に伝えることができ、迅速な救援を仰ぐことができる。

自治会や町内会レベルでは、最低限“向こう3軒両隣”といった人たちとのつきあいが必要であろう。

12. 田舎と都会の違い

今回、例えば、震源地となった淡路島では、死者の数はわずか57人でしかない。もちろん人口密度の違いもはあろうが、それにしても、倒壊家屋の数などから考えても、神戸地区に比して死者数は、かなり少ないのではないだろうか。

ちなみに、全壊と半壊とを合わせた倒壊家屋棟数に対する死者の割合は、全体平均で3.7%だが、芦屋市は9.3%、東灘区は8.9%と極端に高く、灘区は5.5%、西宮市が3.1%。それに比べて、淡路島はわずか0.8%でしかない。もちろん、集合住宅と1戸建ての違いや、死者が特に多く出た木造2階建て住宅の比率などが違うので単純に比較することはできないが、あまりにも差のある数字ではないだろうか。

また、避難所での生活を余儀なくされた避

難者数に対する死者の割合を見ると、全体平均は1.7%だが、西宮市では2.8%、灘区では2.7%と高く、東灘区で1.9%、芦屋市で1.8%、それに比べて淡路島では1.1%と低い。

ここからは、私の推測なのだが、淡路島での死者数の少なさの原因は、二つあると思う。

一つには、どこに（どの家に）誰と誰が住んでいるということが誰にも分かっていて、今回のような場合、誰がどこに生き埋めになっているという情報が正確に把握できた、ということがある。それに比べて、都会では、隣に住む人の家族構成はおろか、名前さえ知らないことも多い。

二つには、消防団あるいは青年団といったムラの自治組織が、迅速さがまず一番に要求される人命救助において、大いに力を発揮した、ということだと思う。2次災害としての火事を防止にすることにおいても、地域住民の日頃のつきあいが大切だったことが各所で言われている。

今後、自警団なども含めた婦人会や消防団などといったムラ型の自治組織の必要性を説く声が高くなりそうなので、そのことについては、警戒しなければならない。

だが、そういったムラ型の（つまり、排他的で、閉鎖的な）組織に変わりうる、新しい（つまり、オープンシステムの）「自前の防災および救援のネットワーク」を、私たちはこれから、さまざまに作りだしていかなければならない。

13. 自前のネットワークを

このことに関して、少しだけつけくわえておくと、今回のように被害が広域におよび、さらには“長期戦”が要求される場合、地域「内」のネットワークは、“自助努力”の限度を遥かに越えてしまっていて、あまり力にならないことがある。

つまり、このような場合、リエアの中でのつきあいより、エリアの外とのつきあいのほうが役立つことのほうが多い。

ちなみに、私の場合を例にとると、今回、いち早く援助を申し出てくれた人は80人を越えるが、地縁がらみの人は（14年同じ

ところに住んでいたが）全くなく、親・きょうだいを除くと、7割近くがサークル活動を通じて知り合った人たちであった（他に2割が仕事を通して知り合った人たち、1割強が学生時代からの友人）。

こういうことを考えると、「持つべきものは（近くの「向こう3軒両隣」より）遠くの友」、ということも言えよう。

さて、話を元に戻すと、情報という面に関しては、携帯ラジオ（と乾電池）を部屋ごとに置いておくことが必要である。

だが、そのこととは別に、個人レベルでも、そしてサークルや自治会などの地域レベルにおいても、無線愛好者とパソコン通信のできる人を何名か確保、もしくは登録しておくことが、大災害時に生き延びるための必要条件である、と言えるのではないだろうか。

最後になるが、今回の震災で亡くなった人たちの安らかな冥福を心から祈るとともに、生き残った人々が1日も早く元の生活を取り戻せるように、国も人も共に最大限の努力をすべきである。

だが、そのことの一方で、生活の便利さをすべて企業に預けきって、金ですべてをあがなうことに慣れきり、自助努力の術を失ってしまっている都会生活者のもろさをも、合わせて反省すべきではないだろうか。

1995年2月記

※『マスコミ市民』95年3月号用に書いた原稿（2月3日脱稿。『マスコミ市民』には、そのうちの約3分の1を掲載）に大幅に加筆したもの。

